



作文の時だけ良い子のふり？

夏休みにつきものの作文の課題、読書感想文あり生活作文あり、定番の「税の作文」、中には「オリジナルの童話」を書いてくるという宿題を出された高校1年生もいました。ところが普段はあんなにおしゃべりなのに「書けない」という悲鳴とともに塾の自習室に持ち込んでくる人がいます。しかたなくちょっと手伝ってあげてもその先の文が続かない場合があります。さすがに読書感想文であらずじだけをダラダラと書く人はいなくなりました。しかし、「～は良くないと思いました。これからは気をつけたいと思います。」というあまり中身の無い「良い子アピール文」になっておしまい。読み手を意識したとたんに、受けがいい文にしようという気持ちが湧いてしまうのかもしれませんが。これって今流行の忖度（そんたく）なのでしょう。か？ 予定調和で終わらせる書き方から逃れられなくなっているのかもしれませんが。しかし本当に入賞するような作品はただの良い子のそつのない文章ではなく、何か読み手の心に届く内容を持っています。その人独自の思いや経験を掘り下げているからでしょう。結局「良い子作文」で終わっている人はしっかり他人の文章を読んだことがないのかもしれませんが。

「情熱大陸」や「プロフェッショナル仕事の流儀」などのテレビドキュメンタリーや新聞の土曜版「フロントランナー」などに登場するのは大成した有名人だけではありません。若くても独創的な活躍をしている人たちも登場します。共通して感じるのは他人の顔色をうかがうのではなく、他人を巻き込んでいく力を持っていること。最近のある調査によると日本の子どもたちは「自分のことを創造的だと思っている」割合が他の国に比べて極端に低いそうです。勉強を続ける意味というのは「自分の思い」を実現させるために社会に働きかける力を持つためではないでしょうか。それがたとえ小さな「思い」でも自分なりの創造的なものであれば自信をもって伝えられる、そんな人になってほしいと思います。この夏はその下地を作っていると思ってください。そんなみなさんを応援しています。